

龍源寺報

令和元年 孟蘭盆号

臨濟宗・妙心寺派	住職 松原信樹
佛母寺住職 松原覺樹	正福寺住職 松原行樹
TEL	3451-1853
FAX	3451-6094

振込 00160-0-104918 東京都港区三田5丁目9-23 (郵便番号 108-0073)

Email: info@ryugenji.com URL: http://www.ryugenji.com

孟蘭盆会におもむ

隣の芝生は、よく見えるものである。今よりもっと恵まれた環境のもとに、又はもっと優れた才能や容姿を備えて順風満帆に過ごすことができたらどれだけ豊かだろうか。一見、幸せそうに見える世界も複雑な面を備えているのが世の中の常だから、人生はどこにおいても、結局は同じようなものであるのかもしれない。

私達は、他人と共存しながら、それぞれ、生きがいを求めて生活している。しかし、生きがいを求めて生活をしているとはいえず、現実には、決して簡単で無く、多くの困難が立ちほだかり、理想を求めても、挫折することがしばしばある。それは、自分の非力さや不注意など自ら引き寄せた結果であり、挫折を受け入れ精進して地に足をつけて前に進んでいかなければならない。さらに、人間の苦しみは、不運や災難、事故や病気など突如思いがけぬありさままで、私達に降りかかってくる。私達が偶然の運命に翻弄されていることを知る時、はじめて大いなるものに生かされていることに気づく。私自身も人に言えないような多くの挫折を経験している。挫折の経験は、自分自身と向き合う唯一の格好な機会ではないだろうか。

仏教では、愛する人との別離の不可避という苦悩を「愛別離苦」とし、会いたくない人との出合いの不可避の苦悩を「怨憎会苦」とした。社会という場は、私達が自己実現を図る大切な基盤でもあるが、人が集まる場では、様々な人間の性格、主義主張が絡み合っている。例えば、娘を公園の滑り台やジャングルジムや砂場に連れて行っても、わずかに二歳児においても、このようなことは、すでに起こっており、生存競争の厳しい現実を改めて知る次第である。

他人に標準を合わせたために、自己喪失が起らないよう、「自分は自分、他人は他人」とその歩む道の違いを心得、しかも、争わずまた、うわべだけのつきあいでもなく、心からの繋がりにおいて自分の道を進むことが肝要ではないだろうか。「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」(『論語』・子路篇)という『論語』の教訓がすべての局面において肝要であろう。つまり、「君子は他人と心から一致するが、うわべだけ同調することはしない。小人はうわべだけ同調するが、心から一致することはない」と。「和」ということは、二つの異なる心を持った人間が心から打ち解けて友となることである。これに対して、「同」とは本当のうわべだけの友となることである。孔子は君子の交わりを求め、小人の交わりを軽蔑し排斥するのである。(信樹)

一 寄 付

本堂改良工事エレベーター増設工事寄付

金二十万円 中澤公孝殿

観音さまに

金五万円 土岐家殿

金一万円 勝田明子殿

ありがとうございました

※大変貴重なご寄付をありがとうございました。
した。龍源寺の周囲が再開発される中、
龍源寺を地域の文化資源の一つとして考
え、先代から引き続き、境内整備に力を
注いで参りたいと思います。未熟者ですが、
今後とも宜しくお願い申し上げます。

(信樹)

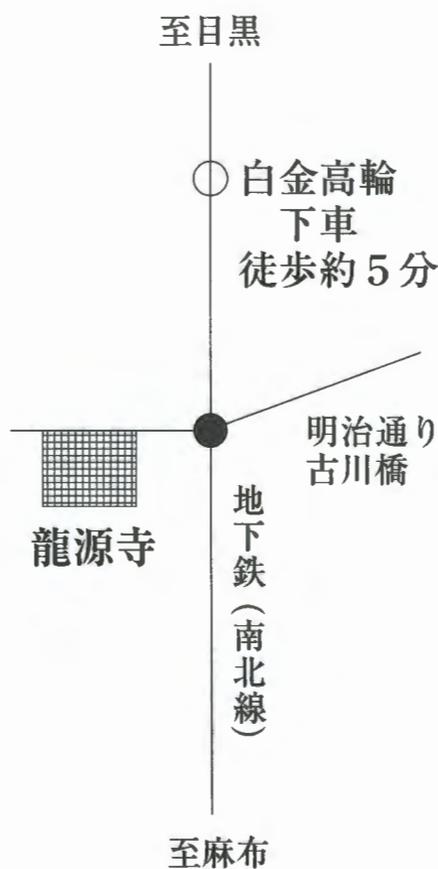
ウラボン法要

一、七月十日（水曜日）午前十一時から

一、法話

一、齋座

- ・新盆の法要を行います。
- ・ご家族そろってお参りください。
- ・駐車場はありません。南北線をご利用ください。



龍源寺の定例会

禅の会(坐禅体験)

指導…松原信樹

定例日…毎月第一土曜日

(一月は別途)

時間…(二回)

午前十時から十二時、

午後一時三十分から

三時三十分

内容…坐禅とお話

会費…来会の時二百円

参加者の方は、サラリーマンの方・

女性の方・学生・会社の社長さん

様々です。大体五十人位。

仏像を彫る会

指導…三木童心

定例日…毎月第二土曜日、

第四土曜日

時間…午前十時三十分から

十二時三十分(初心者)

午後一時三十分から四時

会場…龍源寺花園会館

会費…二千元

写経会

日時…毎月第三土曜日

十四時から十六時

(八・十二月は除く)

受付…十三時五十分より花園

会館

写経会…十四時より『般若心経』

の読経・法話があり、写経会が

始まります

会費…二千元

携行品…小筆など書道用具一式

参加資格…どなたでもご参加いた

だけです

*墨汁は使いません。墨を硯です

ります。早く書写し終わりました

ら、時間まで静かにお待ちください。

間に合わなかった方については、

講師の先生に相談してください。

講師…飯沼定子先生

著作 心が楽になる「観音経」―

ペンで書く写経 松原哲明【著】

飯沼定子【書指導】／佼成出版社

(二〇〇七年五月発売)

柳 緑

孟蘭盆会を迎えます。今年新盆を迎えられるお檀家さまは、

花 紅

七月十日、午前十一時に行われる孟蘭盆会の法要にご参列

お願い申し上げます。従来よ

り棚経に伺わせていただいているお檀家さまには、ハガキにて御案内をさせていただきます。宜しくお願い申し上げます。

▼法話をさせて頂く際、私自身、原稿を仕上げておかないと気が済みません。たえず、基本の事実は再確認し、また、できるだけ原典に当たり調べ直し、他説をも十分に吟味し色々な解釈とも対決しながら法話を作成します。大分・国東半島での十六日間の巡教は、私にとって大変ありがたい機会でした。お寺で昼食をいただいでから、御詠歌が始まり、塔婆供養をし、午後三時頃から法話をさせていただきます。ゆっくりりと時間をかけて、ご先祖と向き合う贅沢な時間だと思われました。巡教中、大分・国見町でご住職をされている方から、哲明和尚の本の中で、哲明和尚が若い時、巡教のため、国見町のお寺で宿泊させていただいた際、夜中、

「サー、サー」と、水をまく音がするため、何かなと思つたら、当時、お寺の書院は、クーラーも無く、暑いため、お寺の奥さまが夜中、庭に水を蒔いて涼しくしてくれたという文のくだりがあり、その水をまいていたのは、なんと、そのご住職のおばあさまだったということ。縁のありがたさを感じた日々でもありました。▼今回の本堂改良工事にあたり、以前よりおつきあいのある方から、「改装された玄関回りの静謐な空間に、デザイン性だけでなく細部までに神経をめぐらせた仕上がりのよいソファ、たっぷりとした空間から醸し出される清潔感あふれる清さに、正に令和の時代に相応しく感動しております」とのお手紙をいただきました。ご寄付をいただいた皆さま、工事関係者に厚く御礼申し上げます。▼六月六日の哲明忌に龍源寺にて現代禅研究会が開催され、全国から二十四名の僧侶の方々が、龍源寺本堂にて研鑽されました。泰道和尚や哲明和尚が築きあげてきたものが、現在の布教師さんの基盤になっているように思えてなりません。若い僧侶の方々も多

く参加され活気のある研修会でした。▼母は、茶道の指導、民生委員、寺の仕事に毎日精一杯生活しています。昨年より車の運転をやめました。生活に不便はないようです。娘の瑞樹も三才になりました。亜矢と共に外出し、同世代の子と触れ合う中で、心身共に成長しています。▼七月二日(月)、午前八時よりお位牌拭き、七月九日、十三時より、ちらし寿司のお野菜の刻みを行います。お手伝いいただける方がいらっしゃいましたら、宜しくお願い申し上げます。▼「おぼん」という言葉は、中国・唐の時代、手足を縛られて逆さに吊される「倒懸の苦しみを受ける」という意味の梵語「ウランバナ」。又は、古代イラン地方の霊魂という意味の「ウルバン」ではないかと言われています。言葉の詮索はともかくとして、日本では、孟蘭盆会の行事が行われた記録は、推古十四年(六〇六)にまで遡ります。ご先祖を思い、自分のルーツを振り返る機会です。七月十日、孟蘭盆会で皆さまにお会いできることを楽しみにしています。ご家族でお参り下さい。(信樹)